

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04376

研究課題名(和文) パーソナリティの生涯発達に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study of Lifelong Development of Personality

研究代表者

小塩 真司 (Oshio, Atsushi)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：60343654

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、パーソナリティが適応に及ぼす影響について詳細に検討することを通じて、パーソナリティそのものの発達の意味を明らかにしようとするものである。そして、パーソナリティ特性の調査年による変化と、年齢によるパーソナリティが具体的行動に及ぼす影響の違いについて検討してきた。自尊感情とYG性格検査の時間横断的メタ分析からは、1990年代以降の日本全体の否定的な自己認識傾向が示された。今後は、この変化の背後にある要因について詳細に検討していく必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日常的によく見られる癖としての行動がパーソナリティに関連することを明らかにした。また自尊感情が近年になるほど平均値が低下傾向にあることや、また多くのパーソナリティ特性が近年ネガティブで情緒不安定な傾向を示すことを明らかにした。これらの研究知見は、パーソナリティが私たちの身近な行動や環境に密接にかかわっており、我々をとりまく社会状況の変化によって、パーソナリティのもつ意味や機能が変わる可能性があることを示唆する。

研究成果の概要(英文)：The present study explores the meaning of personality development through detailed examinations of the process between personality traits and adaptation. In some studies, the age-related change of the personality traits and of the relationships between personality traits and adaptation. The study that examined the relationships between leg-shaking habitual behavior and the Big Five personality reported that significant negative associations between both the tendencies and Agreeableness and Conscientiousness. The studies using cross-temporal meta-analysis revealed that the personality tendencies of Japanese people have tended to be negative and neurotic over time. The studies suggest broad aspects of (may)adaptation of personality traits.

研究分野：発達心理学

キーワード：パーソナリティ 行動 時代 調査 自尊感情 ビッグ・ファイブ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

成人期以降、人間のパーソナリティ特性は「成熟の原則(maturity principle; Caspi, Roberts, & Shiner, 2005)」と呼ばれる、社会的に望ましい方向に発達していくことが知られている。すなわち、海外の知見においては、児童期から青年期にかけては神経症傾向が高まり勤勉性や協調性が低下するのに対し(Soto et al., 2011)、青年期から成人期にかけては神経症傾向が低下し、勤勉性や協調性は徐々に上昇していく(Srivastava et al., 2003; Soto et al., 2011)。そして日本における大規模横断調査でも海外の研究知見と同様に、青年期以降成人期を通じて協調性と勤勉性が上昇することが示されている(川本ら, 2015)。

なぜこのような発達の変化が見られるのであろうか。ひとつの理由は、年齢を重ねるにつれて適応・不適応的なパーソナリティ特性の内容が変化していく可能性があることである。適応の指標とパーソナリティとの関連が、年齢に応じて変化していくという可能性は十分に考えられる。また、適応の時代性についても考慮することが可能である。どのような時代であっても、同じパーソナリティ特性が適応的であるとは限らない。適応の評価は時代や場所によって変化する可能性がある。語彙研究を基礎に生まれたビッグ・ファイブ・パーソナリティの5つの特性は、適応的な側面と不適応的な側面が混在していることが知られている。ただし、ここでも適応・不適応は絶対的なものではない。特定の場所においては適応的に、また別の場所では不適応的に機能する場合があると考えられる。

2. 研究の目的

上記のことを考慮し、本研究ではこれまで一定の方向へのパーソナリティ発達が見られてきた要因を、時代性など複数の状況の観点から明らかにすることである。そして、パーソナリティの生涯発達上の意味や役割について考察していく。本研究の特色は、これまでわが国において蓄積されつつあるパーソナリティの生涯発達の研究 知見に対し、より広い観点からその意義を見出そうとする点にある。

時代に伴う文化の変化の中では、社会に求められるより「良い」パーソナリティ特性の種類も異なることが予想される。ここに「成熟の原則」の発達の観点を加えるならば、各個人がその時代・場所において適応に向けた努力を行い、その時代・場所で適応していこうと長期間生活していくことによって、その社会にとって望まれるパーソナリティ特性が適応的なものとして伸ばされていく、という様相が推測される可能性がある。

3. 研究の方法

本研究では、第1に全国の成人を対象とした広い地域・広い年齢範囲を対象としたインターネット調査を行う。第2に、因果関係や変化を明確化するために一部の参加者を対象にパネル調査を実施する。第3に、心理指標の平均値を調査年ごとに統合する時間横断的メタ分析を実施する。

4. 研究成果

(1) 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響：2017年刊行の論文まで

小塩他(教心研, 2014)はRosenbergの自尊感情平均値に対して時間横断的メタ分析を行い、調査年が近年になるほど自尊感情が低下傾向にあることを示した。本研究はその後数年間に発表された文献も加え、同様の傾向がその後も継続しているのかどうかを検討する。

方法

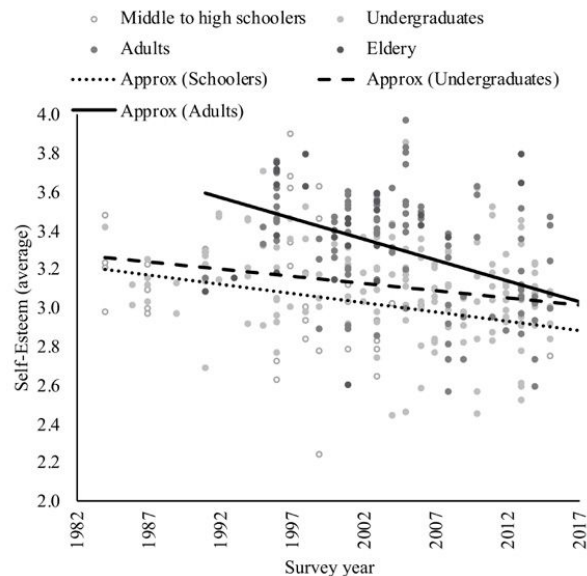
文献の選定とデータの抽出：小塩他(2014)で分析された、1980年から2013年3月までに発

行された和雑誌に加え，CiNii および J-STAGE で 2017 年までに発行された論文を対象に Rosenberg の自尊感情を用いた論文の検索を行った。収集された論文について，次に該当する論文を除外した：平均値やサンプルサイズの報告がない研究，使用項目が極端に少ない研究，尺度の件法を報告していない研究，日本人以外をサンプルとした研究，事例研究，小学生以下を対象とした研究，複数の年齢段階を分割していない研究。最終的に選定された論文数は 169，研究数（平均値の数）は 342，合計サンプルサイズは 66,408 名であった。

コーディング：調査年の報告がある場合にはその年を調査年とした。報告された調査年の平均値が 3.15 年であったため，報告がない場合には報告年から 3 年を引いた値を調査年とした。調査年による曲線関係も検討するため，調査年を中心化し，2 乗項を作成した。年齢段階は中高生，大学生，成人，高齢期とし，中高生を基準としてダミー変数とした。翻訳の種類は，山本他（214 研究），星野（40 研究），桜井（23 研究），その他（65 研究）であった。その他を基準としダミー変数とした。自尊感情尺度は 5 件法に合わせる形で変換した。研究数は 4 件法が 77 研究，5 件法が 234 研究，6 件法が 5 研究，7 件法が 26 研究であった。5 件法を基準とし，4 件法と 6 件法以上をダミー変数とした。また各年齢段階と調査年の交互作用項を設定した。

結果と考察

自尊感情平均値を従属変数とした重回帰分析を行ったところ次の結果が得られた。(1) 中高生や大学生よりも成人，高齢期の平均値が高い (2) 山本他・桜井の翻訳の平均値が高い，(3) 5 件法に対し 4 件法と 6 件法以上の平均値は高い (4) 調査年に従って平均値は低下傾向にある (5) 高齢期のみ傾向が異なる可能性がある。なお年齢別に分析を行ったところ，高齢期の調査年の影響は認められなかった。



(2) 貧乏揺すりや爪噛み行動に及ぼす年齢とパーソナリティの影響

爪噛みや貧乏揺すりは，健康に影響を及ぼす常道的で繰り返し行われる習慣的な行動のひとつである。またこれらの行動は，社会的な望ましさにも強く結びついている行動でもあり，親が子どもの行動を制限しようとするひとつの行動であるとも言える。

爪噛みは，身体に焦点を置いた習慣的な行動のひとつである。実際に，細菌の感染や身体内への細菌・ウイルスの接種など，望ましくない健康上の結果をもたらす可能性がある。そして，日本でも海外でも，望ましくない行為であるとされる。

その一方で貧乏揺すりは，座った状態で足を小刻みにゆする行動である。この行動は世界中で多くの人々が行う行為である一方で，社会的な望ましさは文化によって大きく規定される。日本では「貧乏揺すり」という言葉が表現するように，社会的に望ましくない行為であると捉える人が多い一方で，海外では必ずしもそのようにみなされておらず，社会的な場面でも抑制されることなく貧乏揺すりをする様子を目にすることができる。

これらの習慣的な行動の背後にある要因を推測するうえで，パーソナリティとの関連を検討することには意義がある。なぜなら，それぞれのパーソナリティ特性は特定の社会的な規範や脳神経科学的な傾向にも結びつく可能性があるからである。また，その関連は年齢によって変化する

る可能性がある。

そこで本研究では、これら習慣的な行動とパーソナリティとの関連を検討すると共に、その関連に影響を及ぼす年齢の効果についても焦点をあてる。

方法

調査対象者は、5328名の日本人成人である。平均年齢は49.9歳、18歳から71歳までの年齢範囲であった。貧乏揺すりと爪噛みに関しては、それぞれ1項目で測定した。ビッグ・ファイブに関してはTIPI-Jにより測定された。

結果と考察

年齢、性別、教育段階、ビッグ・ファイブ、そしてビッグ・ファイブと年齢および性別の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。結果から、年齢が高いほどこれらの習慣的行動の頻度が少なく、男性ほど頻度が多い傾向が認められた。また、ビッグ・ファイブと性別の交互作用項も有意となった。神経症傾向は男性において貧乏揺すり傾向に正の影響を示す一方で女性では優位な影響は認められなかった。爪噛みに対しては、男性は外向性の正の影響が見られた一方で、女性では開放性と協調性の負の影響が見られた。

これらの結果から、パーソナリティがこれらの習慣的行動に一定の関連を示すこと、またその背後には協調性の低さや勤勉性の低さといった、周囲の人への配慮や社会的な規範を重要視しない傾向が見られることが示唆された。年齢についてはパーソナリティとの交互作用は認められず、直接的な影響のみ認められた。今後は習慣的行動とパーソナリティの因果関係についてより詳細に検討していく必要があるだろう。

	Leg-shaking		Nail-biting	
	β		β	
Age	-.06	***	-.10	***
Gender	.26	***	.07	***
Education	.01		.00	
BMI	.01		.04	**
N	-.03		-.02	
E	-.05	*	-.02	
O	.04		.05	*
A	-.16	***	-.14	***
C	-.05	*	-.04	
N x Age	-.01		.02	
E x Age	-.02		.01	
O x Age	-.01		-.01	
A x Age	.01		-.03	
C x Age	-.01		-.01	
N x Gender	.05	*	-.01	
E x Gender	.02		.05	*
O x Gender	-.03		-.06	*
A x Gender	-.03		-.05	*
C x Gender	-.02		.00	
	$R^2 = .12, p < .001$		$R^2 = .06, p < .001$	
	$\Delta R^2 = .004, p < .001$		$\Delta R^2 = .005, p < .001$	

Note. Underlined significance probability represents $p < .05$. N = Neuroticism, E = Extraversion, O = Openness, A = Agreeableness, C = Conscientiousness. Gender: 0 = Female, 1 = Male. Education: 0 = Low, 1 = High. BMI = Body Mass Index. These models are second-order models based on linear regression models described in Table 2.

(3) 日本における情緒不安定性の増加

心理変数の時代変化の検討を可能にする手法のひとつが、時間横断的メタ分析 (cross-temporal meta-analysis) である。これは、心理学的概念の時代に伴う変化を明らかにするための一手法であり、調査年ごとに平均値等の統計量を統合するメタ分析である。日本の心理変数における時代変化の様相をより詳細に検討するためには、同時代の変化を自尊感情以外の得点で検討すること、そして自尊感情では捉えることができないそれ以前の時代変化について検討することが必要である。そこで本研究では、これらの問題へのひとつの対処法として、YG 性格検査 (辻岡, 1957, 1972) に注目する。YG 性格検査は 1950 年代に包括的なパーソナリティ検査の作成を目的として開発されたものであり (矢田部, 1954)、現在に至るまで広く用いられているわが国を代表する検査である。

本研究では YG 性格検査の平均値を収集して時間横断的メタ分析を施すことにより、日本におけるパーソナリティ特性の広い範囲の時代変化を検討する。また、自尊感情の時代変化と YG 性

格検査の時代変化の類似性を検討するために、小塩他(2014)で収集された Rosenberg の自尊感情尺度の平均値を用いて、YG 性格検査の平均値の時代変化との一致度を検討する。そしてこれらの検討を通じて、日本のパーソナリティ特性における時代変化の様相について考察する。

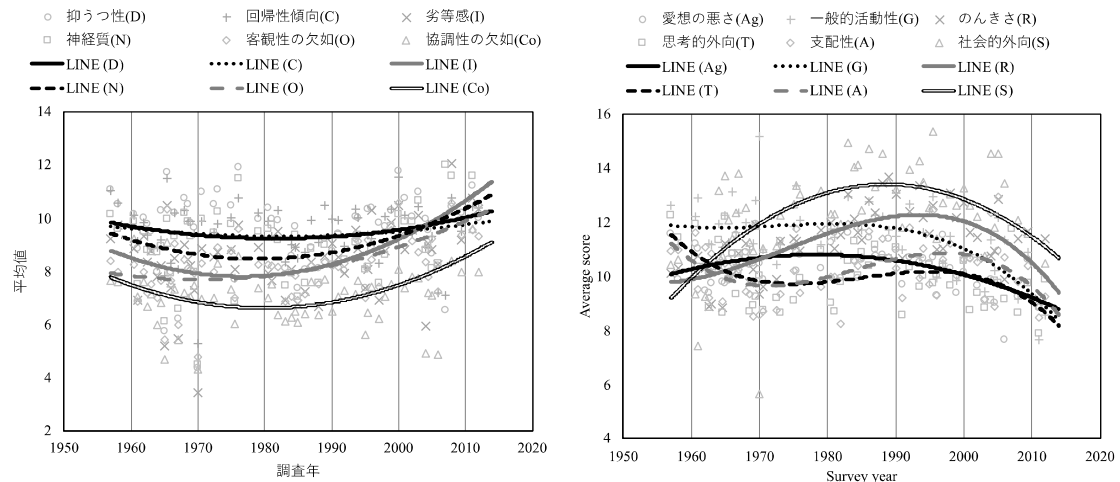
方法

論文データベース J-STAGE および CiNii で検索を行った。検索結果に表示された論文から YG 性格検査を使用している文献を選定した結果、459 本の文献を得た。内容の検討を行った結果、95 本の文献(総サンプルサイズ 50,327)が選定された。全研究数(報告された平均値数)は 245 研究であり、YG 性格検査の各下位尺度によって、228 研究(Ag)から 241 研究(D)までの報告された平均値を得た。

本研究では、YG 性格検査の平均値に対する、年齢段階とサンプルサイズを統制した際の調査年の効果を検討する。そのため、YG 性格検査の 12 尺度それぞれについて、推定された調査年、調査年の 2 乗項および 3 乗項、ダミー変数化された年齢段階、そして各研究のサンプルサイズを独立変数とした重回帰分析を実施した。加えて、自尊感情の時代変化との一致を検討するために、YG 性格検査の平均値と小塩他(2014)で用いた自尊感情の調査年ごとの平均値との順位相関係数を算出した。その際には、いずれについてももっとも研究の多かった大学生の平均値を用いて関連を検討した。

結果と考察

YG 性格検査の 12 尺度それぞれについて重回帰分析を行った。抑うつ性(D), 回帰性傾向(C), 支配性(A)を除くすべての側面について、調査年の 2 乗が有意な影響を示していた。抑うつ性(D)と回帰性傾向(C)については統計的に有意ではなかったものの、調査年の 2 乗が影響する傾向は認められた。またのんきさ(R), 思考的外向(T), 支配性(A)および社会的外向(S)については、調査年が近年になるほど直線的に平均値が増加する関係も認められた。さらに、思考的外向(T)と支配性(A)については、調査年の 3 乗が有意な影響、一般的活動性(G)とのんきさ(R)は有意ではなかったもののその傾向を示していた。年齢段階に関しては、抑うつ性(D), 回帰性傾向(C), 劣等感(I), 神経質(N), 客観性の欠如(O), 協調性の欠如(Co), のんきさ(R)において、大学生よりも成人期以降の方が有意に低い平均値を示していた。また一般的活動性(G)と思考的外向(T)では大学生よりも成人期以降の方が有意に高い平均値を示した。客観性の欠如(O)と協調性の欠如(Co)については、大学生よりも中高生の方が有意に高い平均値を示した。結果から、1950 年代から 2010 年代にかけて、抑うつ性(D)と回帰性傾向(C)以外のすべてで調査年の 2 乗項もしくは 3 乗項が有意な関連を示しており、曲線的な変化を示すことが明らかにされた。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Oshio Atsushi	4. 巻 63
2. 論文標題 Who Shake Their Legs and Bite Their Nails? Self-Reported Repetitive Behaviors and Big Five Personality Traits	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Psychological Studies	6. 最初と最後の頁 384 ~ 390
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12646-018-0462-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ueno Yuki, Hirano Mari, Oshio Atsushi	4. 巻 89
2. 論文標題 The relationship between resilience and age in a large cross-sectional Japanese adult sample	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Japanese journal of psychology	6. 最初と最後の頁 514 ~ 519
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.89.17323	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Oshio Atsushi, Taku Kanako, Hirano Mari, Saeed Gul	4. 巻 127
2. 論文標題 Resilience and Big Five personality traits: A meta-analysis	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 54 ~ 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.paid.2018.01.048	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 橋本泰央・小塩真司	4. 巻 26
2. 論文標題 対人特性とビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性との関連 メタ分析による検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 294 ~ 296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2132/personality.26.3.6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamaguchi Ayano, Akutsu Satoshi, Oshio Atsushi, Kim Min-Sun	4. 巻 62
2. 論文標題 Effects of Cultural Orientation, Self-Esteem, and Collective Self-Esteem on Well-Being	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Psychological Studies	6. 最初と最後の頁 241 ~ 249
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12646-017-0413-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Oshio Atsushi, Ichimura Miho, Migiwa Ifu, Mieda Takahiro	4. 巻 90
2. 論文標題 日本における情緒不安定性の増加 YG性格検査の時間横断的メタ分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 572 ~ 580
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.90.19003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 小塩真司・茂垣まどか・岡田 涼・並川 努・脇田貴文
2. 発表標題 自尊心平均値に及ぼす年齢と調査年の影響 2017年刊行の論文まで
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Oshio, Atsushi
2. 発表標題 Big Five personality traits and self-esteem in Japan: Moderating effect of age on the relationships.
3. 学会等名 The 5th Biennial Meeting of Association for Research in Personality (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小塩 真司	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本経済新聞出版社	5. 総ページ数 216
3. 書名 性格がいい人、悪い人の科学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----